

【佳作】

勿忘草と夜明けの瞳

竹田 祈音花（埼玉県 埼玉県立浦和第一女子高等学校 2年生）

今年も綺麗に咲いてくれた。目の前に広がる花畑は月明かりに濡れている。夜が遺した空を映すその花は、私に一人の少年を思い出させる。何年経っても、鮮やかなまま――。

「いっ、いっ……」

小学生の私は花や蝶が大好きで、よく道端で一人ふらふらと歩いてしまう子だった、あの日も一匹の蝶を夢中で追いかけており、気が付くと周りは茂る草木にひっそりと建つ寂れた建物だけだった。小学三年にもなってもまたやってしまった……と半ば呆れながら、帰り道が分からないなら人に聞くしかない、錆びたドアノブに手をかけた。

「誰かいますかー?」

恐る恐るの中に入ると、そこはがらんとした広い部屋で、床には機械の部品の様なものが幾つか散らばっていた。奥を見ると壊れた機械が二つの山を作って積まれているのが目に入った。ここは何なのか、誰もいないのだろうか。そう思い辺りを見回しているとは、ふと機械の山の間に投げ出された人の腕に気付いた。驚いて座りこんだ私の前でぴくりと手が動き、幼なげな声が聞こえてきた。

「あれ?…お客さん、かな?いらっしやい。ボクはカイ。キミは

誰?」

声と共に現れた少年は機械に囲まれて無邪気に立ち、私に手を差し伸べた。その手に従い立ち上がり、自己紹介をした。

「ミ、ズ、キ…ミズキっていうんだ。素敵な名前だな。」

微笑んでゆれた彼の瞳はとても綺麗な青色だった。昔見た外国人の瞳とも違う。もっと深くて優しい…そうであれば――

「夜明けの空…」

「夜…?夜にはまだ随分早いけど…」

「違う!そうじゃなくて、君の瞳の色、すごく綺麗で…夜明けの空の色だって思ったから。」

そう言うのと、彼は照れた様に笑い、

「そっかあ…そんな事言ってもらえたの、初めてだ。」

…俯いた彼の顔は少し寂しそうに見えた。

その後私達は沢山の話をした。外が燈色に染まり、私を探しに来た母の音がするまで、ずっと。それからほぼ毎日、私はあの場所を訪れた。カイはいつもそこに居て、私の知らない事を色々教えてくれるので飽きることはなかった。しかし、私とさほど年が変わらない様に見えるのに子供らしい事に疎いと感じた。当時庭に咲いていた勿忘草を押し花にして持って行った事があった。カイの瞳の色と同じだね、と言って渡すと、星が瞬くように瞳を輝かせていた。

「それね、押し花にしているの。」

「押し花…?」

「そう、押し花にすると、ずっと一緒に居られるの!」

「ずっと…ありがとうミズキ。大切にするよ。」

その日のカイの瞳は満天の星空だった。

色々話しているうちに分かった事だが、カイは自分の事をあま

り話したがらない。学校や友達のことを聞いても、今は休んでる、ミズキが会っていいだけ、などとはぐらかされてしまっていた。カイは不思議な子だ、と夏休みの宿題を進める手を止め、傍らの彼を見る。屋内とはいえクーラーのないこの場所は蒸し暑く、じっとり汗がにじんでくる。なのに彼の肌はひんやりとして乾いていた。設定した一日のノルマの半分を終わらせた所で、ずっと気になっていた事を聞くことにした。いつものなんでもない話みたい。

「カイと会ってもう随分経つよね。三年…かな？」

「そうだね、ミズキ、もつと小さかったのに。」

「カイは……変わらないね。」

「……………」

「カイは変わってない。背も声も、初めて会った頃のままみたい。前から思ってたの。今も汗、かいてないでしょう？ いいなって…思っ…て……………」

沈黙が重い。蟬の音が空気を圧迫する。

「ねえ、カイ。カイって一体——」

「そうだよ。……ボクは人間じゃない。」

遮る様に吐き出された声はふるえていて。

「ボクはこの研究所で造られた、アンドロイドなんだ。」

そこから先はよく憶えていない。カイの声が蟬にかき消されて、気が付くと自分の部屋でうずくまっていた。笑いとばしてくれると思っていたのに。辛そうに歪んだ表情が頭から離れなかった。朝になって、しわ寄せで増えた宿題を終わらせても、昼ご飯を食べても、ひどく焦る様な不安が拭えなかった。たまたま、夕食までには戻ると書き置きし、家を飛び出した。走って走って、ドアを開けるのもどかしく、研究所に飛びこんだ。

「カイ！」

振り向いたカイの瞳は暗く、星は姿を隠した。

「ごめん、ミズキ。騙してた訳じゃないんだ。でも——」

暗闇が深くなる。この瞳が造られたものだとしても、映す心は造られたものなんかじゃないから。

「本当に、人じゃない。アンドロイドなんだ。……だから、もう——」

「ごめんなさい！」

「昨日、何も言えなくてごめんなさい…驚いちゃって。まさかって思ったから。」

私の言葉が予想外だったのか、カイの目が見開かれ、シャツを握りしめる手がふるえた。

「でも、カイが何だかって、これからも変わらない。ずっと友達だよ。…また此処に来てもいい？」

「許してくれるの？…ボクなんかと、ずっと、友達でいてくれるの？」

大きくうなづくくと、彼は糸が切れたかのように崩れ落ち、声をあげて泣いた。抱きしめた体はやっぱり冷たいけれど、確かに涙が伝ったと、そう感じた。

この出来事以来、私達はさらに仲良くなった。しかし、中学生になり部活に入ると、カイに会える時間も回数も必然的に減っていった。それでも一年の時は、部活の無い日に寄って話をしたり宿題をしったりできた。だが二年になると勉強も部活もより忙しく、ほとんど行けなくなってしまう。たまに行っても、家より集中できるからと勉強をする事が目的になり、カイとは段々話さなくなっていく。寂しげに此方を見るカイに気付いてはいたが、仕方ない、私は忙しいんだと知らないふりをしていた。冬頃

だっただろうか、あの日、部活で失敗して怒られた帰りだった私は余裕がなく、彼に声すらかけなかった。心配そうに顔を覗きこまれ、何、と訊ねると、

「ミズキ、今日、なんだか疲れてるよ？ボクに何かできること、ある？」

と言った。その優しささえその時は面倒で、じゃあ静かにしてとだけ答え、ノートを広げた。やがて沈黙に耐えられなくなったのか、

「ねえ、やっぱり心配だよ……そうだ。何でも話してよ。話したら楽になるかもしれないよ。」
彼の無邪気な声や表情は私をより苛立たせ、つい怒鳴ってしまった。

「アンドロイドのあんたに私の気持ち分かる訳がない！」
と。はっとしてカイを見ると、見た事もない程真っ黒に濁った瞳が茫然と私を映した。言っではいけない事を言ったと気付いてももう遅かった。ごめん、と小さく呟いて逃げるように家に帰った。カイの瞳の闇は、今でも頭から離れない。その後、謝らなくてはと思いつつ勇気がなかった私は、部活の所為、大会の所為、受験の所為にして、とうとうカイの所に行かなかった。昔はもつと素直に謝れたのに。夜空は唯々冷たかった。

寮制の高校に入った私は、最初のゴールデンウィークに実家に帰ってきた。離れていた期間は短い、随分懐かしい感覚がした。ふと庭を見ると勿忘草がゆれていて、半ば逃げるように離れたままだったカイの顔が浮かんだ。今ならあの時の事を謝れる、謝ってまた昔のように話をしたいと淡い期待を抱いてあの研究所を訪れた。

「カイ？居る？」

中に入ってもカイの気配は無く、嫌な予感を感じて建物の裏に行く、

「勿忘……草？」

そこには一面、勿忘草の花畑が広がっていた。その中央でカイが倒れているのが見え、私は思わず駆け寄って抱き起こした。服から覗く手足はび割れ、所々土が入り込んだり錆びたりして痛々しい状態だった。訳が分からず名前を呼び続けた。カイが壊れてしまう。まだ伝えたい事があるのに……！嫌だ、カイ——

「……ズ……キ……？」

「！カイ！私だよ、分かる？」

「ミズキ……ミズキだ……」

久しぶりに見た彼の笑顔は出会った頃と変わらない明るさで……けれど壊れかけた体では余計に痛々しくて、言いたい事が声にならず涙になってぼろぼろとこぼれた。

「ミズキ、泣かないで。……ボクね、ミズキはもう来てくれないかと思っただ。ボクが余計な事言っで怒らせちゃったから。」

「違う！カイは何も……私が、カイにあたって酷い事言っただから……ごめんなさい、カイ。ずっとあなたに謝りたかった。ごめんなさい……」

「いいんだよ。最初は『ずっと』なんてやっぱり嘘なんだと思った。不良品だって捨てられて、前に友達だって言ってくれた子もアンドロイドだって分かったら来てくれなくなつて……でもミズキは戻って来てくれた。本当に嬉しかった。だからミズキの『ずっと』は信じられた……信じたかったんだ。」

私はカイの事を本当に何も知らなかった。信じてくれたカイを簡単に裏切っていた自分が情けなくて仕方なかった。

「ミズキ、これ、憶えてる？」

そう言って伸ばされた腕には、いつかの勿忘草の押し花が大切に握られていた。

「ボクの瞳の色の花：所々欠けちゃったけど、ボクの大切なお守り。ミズキの事、信じてたけど、憶えててくれてるか怖くて。だから沢山咲かせたんだ。綺麗でしょ？」

「この花畑、カイが：？だからそんなに：」

「うん。：ボクも忘れたくなかったから。いつでも思い出せるように。ミズキもいつか来てくれるんじゃないかって。憶えていてくれて、来てくれてありがとう：最期に会えて、本当によかった：」

「待って！最期なんて言わないでよ：もつと話したい事があるのに：ねえカイ：」

声がふるえて言葉にならない。もつと早く此処に来ていれば。あの時すぐに謝っていれば。どうにもならない後悔がぐるぐると巡る。涙を拭うカイの手を握ると、カイは優しく笑って、掠れた声
が切なく鼓膜をふるわせた。

「ミズキ：ずつと：：：友達だよ：」

力をなくした手は芯まで冷えきってしまった。瞼で閉ざされた小さな夜明けの空は、最後の最後まで優しく、綺麗だった。空を見上げる度に彼を思い出すのだろう。彼と約束した『ずつと』が鮮やかなままであるように――。

大人になった今も、私は毎年この場所に来ている。風が吹き、勿忘草がゆれたその一瞬、カイが花畑の中で、笑顔で手を振っている姿が見えた気がした。泣きそうな心を抑えて、明るく手を振り眩いた。

「また来年！」

応えるように、星がきらきらと瞬いた。